

## 修士論文研究ノート ローティにとって残酷さとはなにか : ふたりの作家を手がかりに

著者	増田 祐基
雑誌名	筑波哲学
号	22
ページ	157-160
発行年	2014-03
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/00122581">http://hdl.handle.net/2241/00122581</a>

【修士論文研究ノート】

ローティにとって残酷さとはなにか  
——ふたりの作家を手がかりに——

増田 祐基

序文

- 1 『偶然性・アイロニー・連帯』
- 2 残酷さとはなにか
- 3 なぜローティはふたりの作家を登場させたのか
- 4 自身の思想を「表現する」ものとしての文学  
～「現れの複数性」を表現するために～
- 5 終わりに

リチャード・ローティは『偶然性・アイロニー・連帯』（以下『偶然性～』）において、「公私の区別」というアイデアを提出する。『偶然性～』の目的は、「私」、すなわち、ひとそれぞれが「いかにして生きるか」という問題と、「公」、すなわち、「いかにして他者を気遣うか」という問題は、相容れないものとして、それを区別することを提唱していた。そして、そこで、「公の原理」として上げられていたのが、「残酷さの軽減」という原理であった。本論文はその「残酷さ」について、ローティはどのように考えていたのかを分析している。ローティは「残酷さの軽減」に寄与した著作家として、ウラジミール・ナボコフとジョージ・オーウェルを挙げ、かれらの著作がいかにして、「残酷さの軽減」に寄与しているのかを語っている。このように、『偶然性・アイロニー・連帯』の後半部では、ローティは「リベラル」（＝「残酷さの軽減」）への希望を、「文学」に託している。本論文は、なぜローティが「文学」へ希望を抱くことになったのか、を『偶然性～』の概観を追うことで理解し、その後、ふたりの作家を論じるローティから、かれの考える「残酷さ」のイメージを掴んでいく試みである。

本論文1ではまず、『偶然性・アイロニー・連帯』内の前半部分、すなわち、ナボ

コフとオーウェルの作品の評論に入るまでの箇所をまとめている。この部分は、いわばローティ思想の理論編とも言える箇所である。

まずローティは「偶然性」をキーワードに、デイヴィッドソン、ウィトゲンシュタイン、フロイトを引きながら、「言語」「良心」といったものの「脱神聖化」を図る。「脱神聖化」とは、「言語」「良心」といったものが、時間と偶然性以上のなにものかに基づけられていないことをしめすということを意味している。

そして、ローティのこの「脱神聖化」というアイデアを受け入れると、わたしたちは「アイロニー」へと導かれる。そこで、ローティは、これまでの彼の議論を引き受ける「アイロニスト」という人物がいかなる人物であるかを素描していく。ローティいわく、われわれは「終極の語彙」という、自分がいかにして世界を観るのか、生きるか、他者と関わるか、といった全ての場面で自分を規定する一連の語彙を携えながら生きていくと考える。そして、「アイロニスト」とは、自身がもつそうした語彙について、歴史主義的に、そして唯名論的に考えるもののことである。

さてしかし、「アイロニスト」のなかでも特殊な人物達として、「アイロニストであり、かつ理論家である」と呼ばれる人たちが存在する。ローティが上げるのは、ヘーゲル・ニーチェ・ハイデガーといった人物である。かれらは、アイロニストでありながら、それ以上再記述されない「終極の語彙」を欲することで、「最後の理論」を書きたいと欲してしまう。彼らはアイロニストでありながら、それまでの形而上学に逆戻りしてしまうのであった。

ここにおいて、伝統的な「公的なもの-哲学・思想」、「私的なもの-文学」という結びつきが入れ替わる。アイロニストであり理論家である思想家たちが陥ってしまった普遍への欲求は、「詩人の超越への欲求」と同様、自己の完成にしか寄与しない。

「普遍性を語ること」を「自己の普遍への欲求」とみなすことで、その欲求のもとに編まれた語彙は「私的なもの（自己の完成）」にしか寄与しないのである。そして、「いかに残酷さの軽減を軽減するか」という「公的な問題」は、「普遍的な原理」なしで、文学の想像力による個別具体的なテキスト達に託されることになるのである。

本論文2では、ナボコフとオーウェルを論じるローティから、具体的に「残酷さ」のイメージをつかむ。ローティにとって、「残酷さ」とは、「残酷さの理論」とでもいう抽象的な表現ではなく、常に具体的に、つまり文学によって表現される。

ナボコフ評においては、「私的オブセッション」に取りつかれた人々の「無関心さ」

という残酷さが問題となる。これは、単に「私的オブセッション」に取りつかれた人々の「無関心さ」を描くということではない。ローティは『ロリータ』の読解を通して、『ロリータ』の読者も同様に、「無関心であったこと」に気づかせるような仕掛けを作っている。ローティは、「文学のための文学」にしか関心がなく、「残酷さの軽減」に寄与する気などないと振る舞うナボコフのテキストのなかから、ナボコフがいかに「残酷さ」の問題に対してセンシティブになっていたのかを示した。

オーウェルに対してローティは、2つの点で評価している。ひとつは全体主義の問題点について、いち早く私たちに知らせたという点。そしてもうひとつが、オブライエンという人物の発明である。オブライエンは、ローティによれば「リベラルへの希望を失った知識人」として描かれる。

本論文 3 では、ローティがなぜこのふたりの作家を選び、論じたのかについて、ローティの自伝的エッセイ「トロツキーと野生の蘭」を手がかりに論じている。そこで明らかになったのは、この二人の作家が、ローティの生における問題と、同様のテーマを扱った作家達であるということである。ローティは、青年時代、「野生の蘭」につよく惹かれていた。しかし、同時に父の影響でその思想に浸しんでいたトロツキーはこうした「私的なオブセッション」を由としないのではないか、と不安に感じていた。このローティの野生の蘭への「私的オブセッション」の問題は、ナボコフの評論とリンクしている。

さらに、ローティが大学時代に突き当たった問題は、「全体主義をいかに避けるか」という問題だった。その全体主義の問題とリンクしているのがオーウェル評にあたるのである。

最後に本論文 4 では、ローティがなぜ「文学」に希望を抱いたのか、自説を紹介している。私見では、ローティは自身の「思想」を最後に文学に託すことで、世界の「現われの複数性（世界の相対性）」をもっとも上手く表現することに成功している。つまり、「世界の相対性」を表現するためには、「理論」によってそれを表現するよりも「文学」による表現のほうが優れているのである。ローティは、この着想をプルーストから得ている。プルーストはパースペクティヴァリズムが真の理論であるかどうかを思い煩う必要のないパースペクティヴァリストだった。こうしてローティはプルーストから、相対性や偶然性を表現するためには、理論よりも小説のほうが安全、確実な媒体である、という教訓を得る。そして、ローティはまさに、『偶然性〜』にお

いて、自身が「パースペクティヴァリズムが真の理論であるかどうかを思い煩わないパースペクティヴァリスト」であることを示そうとしたと考えられる。自身が触れてきた哲学を自身の問題意識のものに位置づけながら、自身の思想（世界観）を示し、そしてその出口を「文学」という無限のテキスト達に接続することによって、自身のテキストを「完成した理論」として提出することを回避したのである。

（ますだ・ゆうき 筑波大学大学院人文社会科学研究科在学）